

最近見た作品から何本か取り上げてみようと思います。いつものように新作あり旧作ありといったところで。

まず、ローズ・グラス『愛はステロイド』（2024）原題の『LOVE LIES BLEEDING』は直訳すれば「愛は血を流す」となります。ローズ・グラスはロンドン出身の1990年生まれといえますから、若手女性監督です。本作が2作目の長編作品です。テーマはクィアでありヴァイオレンスということになります。筆者にはヴァイオレンス作品としての受容れとなりましたが、ステロイドによる肉体の強靱化とヴァイオレンスに訴えかける主人公ジャッキーには何ら知的要素が感じられず、むしろ狂気の世界の表出でしかないように思えます。本作で描かれるヴァイオレンスは、単なるアクションの演出ではなく現代社会に蔓延する行き場のない怒りと疎外感の噴出として表現であるなら、それはお決まりの古くからの作品の踏襲に他ならないのではという気もします。「知性すらも焼き尽くすほどの強烈な、抑圧された者たちの怒り」という表現で本作を表す言葉がありますが、それはそれで、ふとジュリア・デュクルノーの『TITANE』（2021）を思い浮かべました。共通するのはクィアの登場人物を恐ろしくも力強いモンスターに仕立てたところでしょうか。それだけではありませんが、社会に対抗するための異常で人工的な強さを求める主張に危機感を覚えるところでもあります。

次に、永田琴の『愚か者の身分』（2025）ですが、永田琴は1971年生まれの女性映画監督、岩井俊二に師事したとありました。現在、やくざ世界が大きく変貌し、「半グレ」なり「トクリュウ」なる犯罪グループの跋扈する世の中ですが、現代の暴力装置の実態を描く意図があったのでしょうか、向井康介（1977~）のシナリオは石川慶の『ある男』（2022）を始めとした実績がありながら、かなり不満を覚える出来でした。ドラマの流れは複層的でリアルな実態を捉えながら、まだ淡泊に思えたのは女性が描けてなかったせいかとも思えます。本作で感じる緊張感やヴァイオレンスの迫力が空事にしか思えない恨みがあります。原作は2018年に大藪春彦新人賞を受賞した西尾潤の同名小説です。「見てから読む」ことにしましょうか。半グレを扱った作品に、2021年の小島央大（1994~）の『JOINT』がありましたが、この時に感じた、かつての東映の任侠・実録路線でのやくざたちとの図らずも浮かび上がった共通項を改めて考えて見たいという気持ちが起こりました。

批判的なことばかりでは減入ってしまうのですが、団塚唯我『見はらし世代』（2025）にも不満が残ります。深い意味を持つ作品として見るべきなのか、どうも全編を通して何か重い澱みを感じてしまいます。本作では、フィックスのカメラを多用し、人物を追う移動撮影を極端に排除した表現が、団塚唯我の戦術とすれば、それはそれで成功しているとも言えます。家庭の崩壊、そして都市の再開発・再生という二つの重いテーマがのしかかり、この二つの一見無関係に思えるものが思いがけなく表裏一体をなす関係性を浮かび上がらせます。表題の「見はらし」は、物事を俯瞰的にみるスタンスでもあるのですが、「見

はらし」がよくなればよくなるほど、人間の抱える不安なり反感といったネガティブな要素が増大し、暴力性の要素さえも表出することを示唆しているようです。変わりゆく街の風景を共有しながら葛藤する現代の人々を表現する言葉としての「見はらし世代」とすればそれは若者世代だけを指すものではないでしょう。劇中では、本来ヒューマンで体温を感じさせる行為で然るべき都市の再開発・再生を手掛ける主人公が、家庭を崩壊させた張本人であるとは片腹痛いものです。基本的にスクラップ・アンド・ビルドを都市の再開発・再生と考える日本人の発想が本作では十分に発揮されます。その限界を感じさせる行為は、過去を切り捨て未来を強制的に見通させるものとも言えます。団塚唯我は本作でさまざまな問いを観客に向けて投げかけます。それな、団塚唯我自身がさまざまな疑問を解決しようとするかのように。劇中、結婚について触れる場面がありますが、結婚観について、プロポーズの言葉として「君を（結婚の）対象とするのは選択肢ではない」という言葉を重く感じました。打算を突き抜けた究極に近い受容を感じたからです。次回作に期待の持てる映画作家です。1998年生まれという若い才能です。劇中に出てくる「MIYASHITA PARK」は、渋谷区と三井不動産が反対運動の盛り上がり了一切無視して強引に推進したことで記憶される再開発案件であり、トータルデザインを手掛けたのは、団塚唯我の父、団塚栄喜だったことは、団塚唯我にとっての大きな引っ掛かりだったのでしょうか。

さて、2025年にフィル・カールソン（1908-1985）監督の『スキャンダル・シート』（1952）が初めて日本で劇場公開されました。73年振りという出来事です。NYのタブロイド紙の編集長の過去を暴かれることの恐れから犯罪に手を染めるという極めてよくある筋なのですが、原作がサミュエル・フラーであることは大いに興味をそそられます。フィル・カールソンの演出は実にスマートでスピーディーでありアメリカン・フィルム・ノワールの正統な作品という印象が強いものです。主演は『オール・ザ・キングスメン』（1949）の名優プロデリック・クロフォードです。パルプ・フィクションのB級作品としての面目躍如たる佳作です。

また、トニー・パーマーの『クリーム/ フェアウェル・コンサート1968』（1969）も今年になり初めて劇場公開された作品であり、伝説のバンド「クリーム」のロンドンのロイヤル・アルバート・ホールでの公演の模様をほぼクローズの画面で捉えた熱さの伝わる作品です。本作の中でのエリック・クラプトンのギター講座とジンジャー・ベイカーのドラム講座は興味深いところ です。

当時、何らかの理由で劇場公開されなかった作品がこうして長い年月を経て公開されるのは実に喜ばしいことであり、またこうした作品群が埋もれている可能性を大いに示唆します。